

小学校英語指導者養成講座に求められる要素の再考

Revisiting Crucial Factors to Consider when Conducting a Special Program
for Teaching English in Elementary Schools

金子 義隆

KANEKO Yoshitaka

Abstract

The purpose of this present study is to revisit the study conducted by Kaneko (2021) which investigated critical factors that should be taken into consideration when conducting special seminars that help teachers learn how to teach English in elementary schools. The present study followed Kaneko's research methods. Meikai University, in collaboration with J-SHINE and other affiliating offices of education, held a series of special seminars for elementary school teachers and others in 2021. This program was called MEIKAI-JOE Plus. Questionnaires were given to the attendees immediately after the series of seminars to evaluate them. The results were calculated and analyzed through statistical methods such as regression analysis in order to investigate what factors affected the degree of the general satisfaction of the participants. The results show that there were no decisive criteria which the participants adopted when they evaluated these seminars. The results reveal, however, that there were a few factors considered influential. Those crucial factors were as follows: explicit explanation by the lecturer; usefulness of materials provided; and usefulness of tasks introduced in the seminar.

キーワード：小学校英語，指導力養成講座，評価，重回帰分析

1. はじめに

文部科学省は、2020年度から全国の小学校で「外国語」を教科として5・6年生に対して導入した。それまで5・6年生で行われていた「外国語活動」は3・4年生での実施となった。「外国語」は週2時間の年間70単位時間、「外国語活動」は週1時間の年間35単位時間を教育課程に取り入れることとなった。この場合の「外国語」は原則として「英語」である（文部科学省，2017）。これによって、小学校における英語教育がますます本格化することになった。しかし、この小学校での英語教育実施に関しては、課題も指摘されていた。その一つが、指

導者の問題である（Kaneko & Otoshi, 2012; 田尻, 2006）。現在、小学校英語を担当する65%以上は学級担任である（文部科学省, 2019）。小学校に「外国語活動」の導入が決まって以来、小学校教員の英語指導力向上を図るためのさまざまな施策が実施されてきた。例えば、独立行政法人教員研修センターの「総合的な学習の時間（小学校英語活動）」研修講座（平成13年度から16年度実施）や、文部科学省の小学校英語活動地域サポート事業における研修講座（平成17年度から実施）などである（金子, 2021）。文部科学省（2014）が実施した「小学校外国語活動実施状況調査」の結果では、外国語活動に対する意識に関して、91.5%の教員が「児童と一緒に楽しんでいる」と答えた。ところが一方で、67.3%が「英

語が苦手である」、60.8%が「準備などに負担感がある」、34.6%が「自信を持って指導している」と回答した。自信を持って指導できる教員はまだまだ少なく、65%以上の教員は十分に自信を持って指導ができていないようである。

文部科学省は2020年教員養成機関等との連携による小学校外国語の専門人材育成・確保事業（小学校外国語のための免許法認定講習等実施事業）に関する公募を公示した。この趣旨は、小学校での外国語活動や外国語の授業において、教師の負担を軽減しつつ質の高い授業を行える指導体制を構築するため、現職の小学校教師等を対象にした外国語活動及び外国語科（英語科）の指導に対応する講習等を開発し、実施することであった。そして、本学は小学校英語指導の研究を進めてきたことを基に、過去20年にわたり小学校英語の指導者を認定してきたJ-SHINE（小学校英語英語指導者認定協議会）と協力して実施することとしてこの公募に応募した。その結果、文部科学省から事業の委託を受けた。

本学の2020年度の委託事業（以後、MEIKAI-JOEと呼ぶ）においては、J-SHINEの協力を仰ぎながら本学の講座開発実施チームを中心に講座内容を検討し、決定した。その際、「英語教育コアカリキュラム」を踏まえて、3つの課題：①学級担任が単独で行う授業における指導方法と指導の改善；②ALTとのTTにおける望ましい学級担任の指導の在り方；③指導と評価の一体化の具体的方法を取り扱う全5回の講座を実施した。講座のテーマは以下の通りである。

【第1回】学習指導要領

【第2回】望ましいティーム・ティーチングの在り方

【第3回】Small Talk の実際とデジタル教科書の使い方

【第4回】学習指導と評価

【第5回】本講座のまとめと中学校への接続の期待

受講対象者は、東京都足立区、千葉県浦安市及び秋田県横手市（3自治体ともに明海大学と連携協定を締結）公立小学校の教員であり、毎回100名前後が受講した。各講座終了後の評価アンケートによれば、MEIKAI-JOEは総じて受講者に高い評価を受けた。受講者がどういった要素を基準として講座の評価を決めるのかを把握しておくことは、講座実施側としてはとても重要なことである。そこで、金子（2021）はMEIKAI-JOEの5つの講座の評価を重回帰分析を使ってさらに深く分析した。その結果、小学校英語指導者養成講座が持つべき要素について4つの教育的示唆（受講者のニーズに合致する講座内容、講座内タスクの重要性、講座資料の重要性、講師の分かりやすい説明）を提示した。

2021年度、本学は再度文部科学省からの委託を受けて、前年のMEIKAI-JOE実施の経験を踏まえた発展版となる事業（以後、MEIKAI-JOEプラスと呼ぶ。）を実施した。MEIKAI-JOEプラスの実施概要は以下の通りである。

<実施概要>

J-SHINEや小学校英語教育学会愛知支部理事を協力機関・外部指導者として、外国語活動及び外国語科（英語科）の指導に対応する講習、講座の開発、実施した。

【目的】小学校外国語活動・外国語科が導入された新学習指導要領を円滑に実施するため、教師の負担を軽減しつつ、質の高い授業を行える指導体制を構築する。

【受講対象者】東京都足立区、千葉県浦安市、秋田県横手市、福島県いわき市及び新潟県妙高市の公立小学校の教員等とする。

【講座テーマ】

【第1回】：新学習指導要領改訂の趣旨及び第二言語習得理論を踏まえた小学校英語科等の指導の心構え

【第2回】～【第5回】：5つの領域ごとの活動事例（「聞くこと」「読むこと」「話すこと（やり取り）」

「話すこと（発表）」「書くこと」

【第6回】：小・中・高等学校における指導の接続

【第7回】～【第10回】：授業研究①～④

MEIKAI-JOE プラスでは、MEIKAI-JOE と比較して講座の実施回数と内容において大きく変化した。MEIKAI-JOE プラスでは講座は前年度の2倍の10回になった。そして、第1回から第6回は講義型の講座とし、第7回から第10回は新しい試みとして授業研究型の講座とした。そのため、第1回から第6回講座後実施の評価アンケートと第7回から第10回講座後の評価アンケートは内容を変更した。また、MEIKAI-JOE プラスでは前年度の3区市から2つの市が加わり、受講対象者の多様性も拡大した。

2. 方法

2.1 目的

本研究の目的は、MEIKAI-JOE プラス全10回講座の事後評価アンケートの結果を分析し、金子(2021)が行った研究と比較し、小学校英語指導者養成講座が含むべき要素について再度検討することである。

2.2 参加者

東京都足立区、千葉県浦安市、秋田県横手市、福島県いわき市及び新潟県妙高市の公立小学校の教員等がMEIKAI-JOE プラスの講座を受講した。受講者の立場は、低学年担任や中学年担任、高学年担任、英語専科教員、教育委員会所属のアドバイザー、教育委員会指導主事、学校管理職と多岐に渡った。毎回100名以上の受講者が受講し、講座実施後の評価アンケートに回答してくれた回答者がこの研究の参加者である。

講座評価アンケートは、上述した通り講義型講座（第1回から第6回）用のアンケートと授業研究（第7回から第10回）用と2種類を使用した。講義

型講座評価アンケート（資料1）は、5件法で最初に属性に関する質問4つ、次に内容に関する14の質問で構成された。また、授業研究型講座評価アンケート（資料2）も同様に5件法で最初に属性に関する質問4つと、次に内容に関する9の質問で構成された。これらの質問によって受講者による詳しい講座評価を可能とし、それによって各講座を講座実施者が詳しく分析できるようにするためである。質問の中には、受講者の講座の満足度を知るために「総合的にこの講座に満足できましたか。」（これ以降、満足度質問と呼ぶ。）という問いを入れた。

本研究の方法は、金子(2021)に倣うものとした。満足度質問に影響を与える他の質問の特定とその質問の影響度を特定するために、満足度質問を従属変数とし、他の質問を独立変数としてSPSSを使って重回帰分析をステップワイズ法を用いて行った。これによって、「最も妥当性の高いモデルを作る」ためである（石川, 2010, p.118）。計10回の講座をそれぞれに分析した。また、「このような機会がまたあれば、受講したいですか。」という質問をしたが、これは満足度質問とは独立した、満足度質問への回答に影響を与えない質問だと判断して、本研究から除外した。

3. 結果

第1回講座から分析する。上述したように満足度質問と他の質問との関係を表すモデルを作成するために、重回帰分析を用いて一番妥当性の高いモデルを探索した。その結果が表1であり、モデルが5つ作られた。その中で一番妥当性の高いモデルはモデル5であり、全体の約64%を説明できることが分かった。

表2からは、各モデルにおける満足度質問に影響を与える他の質問のそれぞれの影響力を読み取ることができる。一番妥当性の高いモデル5においては、質問「2. 講座の内容は学校現場のニーズに

合っていましたか。」と質問「8. 講座前のタスクは役に立ちましたか。」、質問「5. 講座で提示された資料は今後活用できますか。」、質問「7. 講師の説明は分かりやすかったですか。」、質問「4. 講座内容はご自分にとって適切でしたか。」の回答が満足

度質問の回答に影響を与えていることが分かった。これは、表2の標準化係数ベータの数値を見れば分かる。質問2が全体の影響力の約46%を説明しており、一番大きい。質問8は約17%、質問5と質問7は約16%、質問4は14%となっている。ここに登場していない質問は満足度質問には影響を与えていないことを意味している。表1と表2の結果から、上記の5つの質問への回答に満足度質問への回答は約64%影響を受け、特に質問2への回答に強い影響(約46%)を受けていることが明らかになった。

表1 第1回講座モデルの要約

モデル	R	R2 乗	調整済み R2 乗	推定値の標準誤差
1	.755 ^a	0.570	0.567	0.462
2	.774 ^b	0.600	0.594	0.447
3	.788 ^c	0.621	0.613	0.437
4	.797 ^d	0.635	0.625	0.430
5	.804 ^e	0.647	0.635	0.424

次に、第2回講座を同様に分析した。表3によれば、4つのモデルが作成されたが、最も妥当なもの

表2 第1回講座モデルの係数^a

モデル		非標準化係数		標準化係数	t 値	有意確率
		B	標準誤差	ベータ		
1	(定数)	0.559	0.105		5.344	0.000
	質問2	0.731	0.053	0.755	13.867	0.000
2	(定数)	0.356	0.119		2.999	0.003
	質問2	0.607	0.064	0.627	9.541	0.000
	質問8	0.204	0.062	0.215	3.269	0.001
3	(定数)	0.230	0.124		1.851	0.066
	質問2	0.483	0.076	0.499	6.356	0.000
	質問8	0.183	0.061	0.193	2.983	0.003
	質問5	0.208	0.074	0.203	2.812	0.006
4	(定数)	-0.229	0.229		-1.001	0.319
	質問2	0.507	0.075	0.524	6.715	0.000
	質問8	0.189	0.060	0.199	3.128	0.002
	質問5	0.202	0.073	0.197	2.773	0.006
	質問4	0.142	0.060	0.123	2.377	0.019
5	(定数)	-0.320	0.230		-1.393	0.166
	質問2	0.447	0.080	0.462	5.616	0.000
	質問8	0.160	0.061	0.168	2.610	0.010
	質問5	0.164	0.074	0.160	2.214	0.028
	質問4	0.161	0.060	0.140	2.710	0.008
	質問7	0.166	0.076	0.160	2.171	0.032

がモデル4であり、全体の約68%を説明できることが分かった。

表3 第2回講座モデルの要約

モデル	R	R2 乗	調整済み R2 乗	推定値の標準誤差
1	.741 ^a	0.549	0.546	0.451
2	.796 ^b	0.634	0.629	0.408
3	.818 ^c	0.670	0.664	0.388
4	.827 ^d	0.684	0.676	0.381

表4から、上述のモデル4は質問2と質問7、質問5、そして質問8に影響を受けていることが分かった。その中でも質問2の影響力が約33%と最も大きいことが分かった。

第3回講座も同様に分析をした。表5によれば、4つのモデルが作られたが、最も妥当なものはモデル

4であり、全体の約71%を説明できることが分かった。

表5 第3回講座モデルの要約

モデル	R	R2 乗	調整済み R2 乗	推定値の標準誤差
1	.774 ^a	0.600	0.597	0.505
2	.828 ^b	0.686	0.682	0.449
3	.843 ^c	0.710	0.704	0.433
4	.847 ^d	0.718	0.711	0.428

表6によれば、上述の最も妥当なモデル4においては、質問「10. 講座中のタスクは役に立ちましたか。」と質問7、質問4、そして質問「1. 講座の内容は理解できましたか。」が満足度質問に影響を与えていることが分かった。その中で、質問10が最大であった(41%)。

表4 第2回講座モデルの係数^a

モデル		非標準化係数		標準化係数	t 値	有意確率
		B	標準誤差	ベータ		
1	(定数)	0.488	0.095		5.150	0.000
	質問2	0.742	0.052	0.741	14.166	0.000
2	(定数)	0.260	0.093		2.787	0.006
	質問2	0.489	0.063	0.488	7.796	0.000
	質問7	0.388	0.063	0.386	6.170	0.000
3	(定数)	0.082	0.098		0.832	0.407
	質問2	0.428	0.061	0.427	6.966	0.000
	質問7	0.333	0.061	0.332	5.443	0.000
	質問8	0.188	0.045	0.217	4.214	0.000
4	(定数)	0.029	0.099		0.291	0.771
	質問2	0.334	0.070	0.333	4.790	0.000
	質問7	0.311	0.061	0.309	5.123	0.000
	質問8	0.146	0.046	0.168	3.138	0.002
	質問5	0.195	0.072	0.183	2.697	0.008

表6 第3回講座モデルの係数^a

モデル		非標準化係数		標準化係数	t 値	有意確率
		B	標準誤差	ベータ		
1	(定数)	0.235	0.114		2.056	0.042
	質問 10	0.911	0.061	0.774	15.045	0.000
2	(定数)	0.026	0.107		0.241	0.810
	質問 10	0.582	0.074	0.494	7.824	0.000
	質問 7	0.464	0.072	0.406	6.423	0.000
3	(定数)	0.001	0.103		0.007	0.994
	質問 10	0.493	0.076	0.419	6.485	0.000
	質問 7	0.349	0.077	0.306	4.547	0.000
	質問 1	0.218	0.062	0.224	3.514	0.001
4	(定数)	-0.327	0.189		-1.727	0.086
	質問 10	0.483	0.075	0.411	6.415	0.000
	質問 7	0.338	0.076	0.296	4.439	0.000
	質問 1	0.240	0.062	0.247	3.855	0.000
	質問 4	0.113	0.055	0.091	2.057	0.041

続いて第4回講座の分析をした。表7によれば、モデルは4つ作られたが、最も妥当なモデルはモデル4であり、全体の約72%を説明できることが分かった。

表7 第4回講座モデルの要約

モデル	R	R2 乗	調整済み R2 乗	推定値の標準誤差
1	.780 ^a	0.608	0.606	0.343
2	.830 ^b	0.689	0.684	0.307
3	.846 ^c	0.716	0.710	0.294
4	.851 ^d	0.725	0.717	0.291

表8によれば、モデル4では、質問5と質問10、質問7、そして質問1が影響を与えていることが分かった。第4回講座において、最も影響力の強かったものは質問5であった(約41%)。

第5回講座の分析を行った。表9によれば、モデルは4つ作られたが、モデル4が最も妥当なモデルで、全体の約69%を説明できることが分かった。

表9 第5回講座モデルの要約

モデル	R	R2 乗	調整済み R2 乗	推定値の標準誤差
1	.715 ^a	0.511	0.508	0.363
2	.805 ^b	0.648	0.644	0.309
3	.826 ^c	0.683	0.676	0.294
4	.835 ^d	0.697	0.688	0.288

表10からモデル4では、質問5と質問10、質問7、そして質問2の4つの質問が影響を与えていることが分かった。そして、最大の影響力を持っているのが、質問5であることが分かった(約31%)。

表 8 第 4 回講座モデルの係数^a

モデル		非標準化係数		標準化係数	t 値	有意確率
		B	標準誤差	ベータ		
1	(定数)	0.339	0.073		4.622	0.000
	質問 5	0.672	0.045	0.780	15.005	0.000
2	(定数)	0.163	0.072		2.267	0.025
	質問 5	0.460	0.053	0.534	8.679	0.000
	質問 10	0.343	0.056	0.375	6.101	0.000
3	(定数)	0.073	0.073		1.009	0.315
	質問 5	0.382	0.055	0.444	6.955	0.000
	質問 10	0.253	0.059	0.277	4.285	0.000
	質問 7	0.256	0.069	0.238	3.698	0.000
4	(定数)	0.019	0.076		0.255	0.799
	質問 5	0.353	0.056	0.410	6.306	0.000
	質問 10	0.252	0.058	0.276	4.313	0.000
	質問 7	0.199	0.073	0.185	2.709	0.008
	質問 1	0.120	0.056	0.124	2.134	0.035

表 10 第 5 回講座モデルの係数^a

モデル		非標準化係数		標準化係数	t 値	有意確率
		B	標準誤差	ベータ		
1	(定数)	0.453	0.078		5.801	0.000
	質問 5	0.618	0.050	0.715	12.310	0.000
2	(定数)	0.151	0.078		1.944	0.054
	質問 5	0.394	0.052	0.456	7.563	0.000
	質問 10	0.460	0.061	0.452	7.501	0.000
3	(定数)	0.050	0.078		0.638	0.525
	質問 5	0.307	0.054	0.355	5.645	0.000
	質問 10	0.346	0.065	0.340	5.303	0.000
	質問 7	0.306	0.078	0.264	3.930	0.000
4	(定数)	0.003	0.079		0.041	0.967
	質問 5	0.267	0.056	0.309	4.814	0.000
	質問 10	0.310	0.066	0.304	4.718	0.000
	質問 7	0.272	0.077	0.235	3.511	0.001
	質問 2	0.146	0.056	0.154	2.593	0.011

第6回講座も同様に分析をした。表11によれば、3つのモデルが作られたが、最も妥当なものはモデル3であり、全体の約57%を説明できることが分かった。

表11 第6回講座モデルの要約

モデル	R	R2 乗	調整済み R2 乗	推定値の標準誤差
1	.680 ^a	0.462	0.458	0.454
2	.745 ^b	0.555	0.548	0.414
3	.764 ^c	0.584	0.573	0.403

表12によれば、上記の最も妥当なモデル3においては、質問7と質問5、そして質問10が満足度質問に影響を与えていることが分かった。その中で、質問7が最大であった(34%)。

第7回講座からは授業研究型であるため、評価アンケートを変更した。そのため、質問の内容も変更した。第7回講座では、表13のモデルが算出され

た。表13によれば、3つのモデルが作られたが、最も妥当なものはモデル3であり、全体の約55%を説明できることが分かった。

表13 第7回講座モデルの要約

モデル	R	R2 乗	調整済み R2 乗	推定値の標準誤差
1	.673 ^a	0.453	0.448	0.460
2	.725 ^b	0.525	0.517	0.430
3	.748 ^c	0.560	0.548	0.416

表14によれば、最も妥当なモデル3においては、質問「5. 講師の指導・助言は役に立ちましたか。」と質問「1. 授業動画の中の言語活動は今後ご自分の授業で活用できそうですか。」、そして質問「3. 動画視聴後の協議で出た他の受講者からのコメントは参考になりましたか。」が満足度質問に影響を与えていることが分かった。その中で、質問5が最大であった(35%)。

表12 第6回講座モデルの係数^a

モデル		非標準化係数		標準化係数	t 値	有意確率
		B	標準誤差	ベータ		
1	(定数)	0.662	0.108		6.135	0.000
	質問7	0.654	0.064	0.680	10.236	0.000
2	(定数)	0.382	0.113		3.374	0.001
	質問7	0.431	0.073	0.447	5.874	0.000
	質問5	0.367	0.073	0.384	5.036	0.000
3	(定数)	0.276	0.116		2.377	0.019
	質問7	0.324	0.080	0.336	4.031	0.000
	質問5	0.263	0.079	0.275	3.305	0.001
	質問10	0.278	0.097	0.260	2.874	0.005

表 14 第 7 回講座モデルの係数^a

モデル	非標準化係数		標準化係数	t 値	有意確率	
	B	標準誤差	ベータ			
1 (定数)		0.490		3.966	0.000	
	質問 5	0.785	0.082	0.673	9.627	0.000
2 (定数)		0.232	0.132		1.761	0.081
	質問 5	0.561	0.094	0.481	5.982	0.000
	質問 1	0.352	0.085	0.331	4.118	0.000
3 (定数)		0.160	0.130		1.234	0.220
	質問 5	0.405	0.105	0.347	3.866	0.000
	質問 1	0.299	0.085	0.281	3.533	0.001
	質問 3	0.247	0.084	0.251	2.950	0.004

第 8 回講座も同様に分析をした。表 15 によれば、3つのモデルが作られたが、最も妥当なものはモデル 3 であり、全体の約 58% を説明できることが分かった。

表 15 第 8 回講座モデルの要約

モデル	R	R ² 乗	調整済み R ² 乗	推定値の標準誤差
1	.704 ^a	0.496	0.492	0.434
2	.757 ^b	0.573	0.566	0.401
3	.766 ^c	0.587	0.577	0.396

表 16 によれば、最も妥当なモデル 3 においては、質問 5 と質問 1、そして質問 3 が満足度質問に影響を与えていることが分かった。その中で、質問 5 が最大であった (42%)。

第 9 回講座も同様に分析をした。表 17 によれば、2つのモデルが作られたが、最も妥当なものはモデル 2 であり、全体の約 57% を説明できることが分かった。

表 16 第 8 回講座モデルの係数^a

モデル	非標準化係数		標準化係数	t 値	有意確率	
	B	標準誤差	ベータ			
1 (定数)		0.445	0.104		4.267	0.000
	質問 5	0.769	0.072	0.704	10.686	0.000
2 (定数)		0.237	0.107		2.217	0.029
	質問 5	0.539	0.083	0.494	6.459	0.000
	質問 1	0.358	0.079	0.349	4.561	0.000
3 (定数)		0.166	0.111		1.494	0.138
	質問 5	0.455	0.093	0.417	4.904	0.000
	質問 1	0.312	0.081	0.303	3.842	0.000
	質問 3	0.171	0.086	0.163	1.983	0.050

表 17 第 9 回講座モデルの要約

モデル	R	R2 乗	調整済み R2 乗	推定値の標準誤差
1	.691 ^a	0.478	0.473	0.388
2	.762 ^b	0.581	0.574	0.349

表 18 によれば、最も妥当なモデル 2 においては、質問 3 と質問 1 が満足度質問に影響を与えていることが分かった。その中で、質問 3 が最大であった (44%)。

最後に、第 10 回講座も同様に分析をした。表 19 によれば、3 つのモデルが作られたが、最も妥当なものはモデル 3 であり、全体の約 62% を説明でき

ることが分かった。

表 19 第 10 回講座モデルの要約

モデル	R	R2 乗	調整済み R2 乗	推定値の標準誤差
1	.704 ^a	0.496	0.491	0.443
2	.756 ^b	0.571	0.563	0.411
3	.794 ^c	0.631	0.621	0.383

表 20 によれば、最も妥当なモデル 3 においては、質問 5 と質問 3、そして質問 1 が満足度質問に影響を与えていることが分かった。その中で、質問 3 が最大であった (37%)。

表 18 第 9 回講座モデルの係数^a

モデル		非標準化係数		標準化係数	t 値	有意確率
		B	標準誤差	ベータ		
1	(定数)	0.534	0.099		5.401	0.000
	質問 3	0.662	0.066	0.691	10.038	0.000
2	(定数)	0.312	0.099		3.164	0.002
	質問 3	0.423	0.075	0.442	5.636	0.000
	質問 1	0.363	0.070	0.407	5.181	0.000

表 20 第 10 回講座モデルの係数^a

モデル		非標準化係数		標準化係数	t 値	有意確率
		B	標準誤差	ベータ		
1	(定数)	0.539	0.119		4.534	0.000
	質問 5	0.767	0.075	0.704	10.265	0.000
2	(定数)	0.343	0.119		2.883	0.005
	質問 5	0.531	0.088	0.488	6.021	0.000
	質問 3	0.384	0.089	0.349	4.313	0.000
3	(定数)	0.167	0.119		1.399	0.165
	質問 5	0.297	0.100	0.273	2.975	0.004
	質問 3	0.369	0.083	0.336	4.448	0.000
	質問 1	0.310	0.075	0.331	4.127	0.000

4. 考 察

上記の重回帰分析の結果から明らかになったことを以下に述べる。まず、講座ごとに満足度質問に影響を与えた他の質問を以下に表としてまとめた（表 21 と表 22）。まず、表 21 から分析する。面白いことに講座ごとに影響力のある質問が異なっていることが分かった。質問「2. 講座の内容は学校現場のニーズに合っていましたか。」が第 1 回と第 2 回では最大の影響力を持っているが、第 3 回、第 4 回、第 6 回では全く影響力は与えていない。第 5 回でも影響力は 4 位である。一方、質問「5. 講座で提示された資料は今後活用できますか。」は、第 3 回以外は全ての回で強い影響力を持っている。また、質問「7. 講師の説明は分かりやすかったですか。」は全回を通して強い影響力を持っている。質問「10. 講座中のタスクは役に立ちましたか。」は第 1 回と第 2 回を除き強い影響力を持っている。

表 21 講義型講座ごとの影響力

	影響力 1 位	影響力 2 位	影響力 3 位	影響力 4 位
第 1 回講座	質問 2 (46%)	質問 8 (17%)	質問 5 (16%)	質問 7 (16%)
第 2 回講座	質問 2 (33%)	質問 7 (31%)	質問 5 (18%)	質問 8 (17%)
第 3 回講座	質問 10 (41%)	質問 7 (30%)	質問 1 (25%)	質問 4 (9%)
第 4 回講座	質問 5 (41%)	質問 10 (28%)	質問 7 (19%)	質問 1 (12%)
第 5 回講座	質問 5 (31%)	質問 10 (30%)	質問 7 (24%)	質問 2 (15%)
第 6 回講座	質問 7 (34%)	質問 5 (28%)	質問 10 (26%)	該当なし

上記の結果から、受講者の満足度に影響を与える講座の要素は講座ごとに変化することが分かった。つまり、受講者は全ての講座を評価する普遍的な評価基準を最初から持って受講しているわけではなく、受講した講座ごとに判断基準を変えていると言える。

しかし、これは金子（2021）の結果と少し違っている。金子（2021）では、満足度に強い影響力を与える要素は比較的一様であった。特に、受講者のニーズに合致する講座内容と講座資料の重要性は全講座を通して影響力が強かった。恐らくこれは、前回の MEIKAI-JOE と比べて、MEIKAI-JOE プラスの講座内容はよりバラエティーに富んでいたことが一つの要因になっているかもしれない。上述したように、MEIKAI-JOE プラスでは、理論的な側面を中心とした講座だけでなく、前回になかった 5 つの領域ごとの活動事例（「聞くこと」「読むこと」「話すこと（やり取り）」「話すこと（発表）」「書くこと」）に関する講座も取り入れた。これは MEIKAI-JOE 実施後のアンケートによって明らかになった受講者のニーズに応えるためであったのだが、その結果、MEIKAI-JOE プラスの講座内容は前回と比べて多様性を持つことになった。

確かに、受講者の評価基準は講座ごとに変容するようである。しかし、表 21 全体を眺めてみると全くのランダムに評価基準を選んでいる訳ではないことが分かる。上述したように、質問「7. 講師の説明は分かりやすかったですか。」は全回を通して強い影響力を持っている。つまり、「講師の説明の分かりやすさ」は講座を評価するための重要な要素である。また、質問「5. 講座で提示された資料は今後活用できますか。」は第 3 回以外全ての回で強い影響力を持っていることから、受講者は講座資料の有用性にも重きを置いている。また、質問「10. 講座中のタスクは役に立ちましたか。」や質問「2. 講座の内容は学校現場のニーズに合っていましたか。」も時として強い影響力を持つことから、講座内のタスクや学校現場のニーズも見逃せない要素だと分かる。

次に、表 22 を分析する。第 7 回から第 10 回での評価アンケートの質問数（9 個）が第 1 回から第 6 回の評価アンケートの質問数（14 個）と比べて少ないので当然かもしれないが、表 22 では影響力を

持っている質問は表 21 よりも限られているし、結果はある程度の一様性を示している。第 2 回講座を除いて、質問「5. 講師の指導・助言は役に立ちましたか。」は強い影響力を持っている。一方、質問「3. 動画視聴後の協議で出た他の受講者からのコメントは参考になりましたか。」は全ての回で影響力を持っている。また、質問「1. 授業動画の中の言語活動は今後ご自分の授業で活用できそうですか。」も同様に全ての回で強い影響力を持っている。

表 22 授業研究型講座ごとの影響力

	影響力 1 位	影響力 2 位	影響力 3 位
第 7 回講座	質問 5 (35%)	質問 1 (28%)	質問 3 (25%)
第 8 回講座	質問 5 (42%)	質問 1 (30%)	質問 3 (16%)
第 9 回講座	質問 3 (44%)	質問 1 (41%)	該当なし
第 10 回講座	質問 3 (34%)	質問 1 (33%)	質問 5 (27%)

表 22 によれば、質問「1. 授業動画の中の言語活動は今後ご自分の授業で活用できそうですか。」は授業研究型講座の全 4 回で影響力 2 位の力を持っていた。このことから、受講者は講座内で示された言語活動を重要視していることが分かった。つまり、受講者は自分の授業で活用できる言語活動を講座に求めているからであろう。これは前回の MEIKAI-JOE の実施後の全講座総合アンケートへの回答からも言えることであった。

また、質問 1 同様に全講座で影響力を示したのは質問「3. 動画視聴後の協議で出た他の受講者からのコメントは参考になりましたか。」である。MEIKAI-JOE プラスで初めて授業研究型講座を取り入れたため前回の MEIKAI-JOE ではなかった要素である。受講者は別の受講者のコメントから学んでいて、それに価値を見出しているようである。この質問 3 と質問 1 は講座内のタスクとみなすことができると考えられる。つまり、講義型講座のアン

ケートの質問である「10. 講座中のタスクは役に立ちましたか。」と同じ概念を表していると考えられる。

そして、第 9 回講座以外は全ての講座で影響力があったのは、質問「5. 講師の指導・助言は役に立ちましたか。」である。これは、講義型講座における「講師の説明の分かりやすさ」にかなり重なる要素だと言える。上述したように、この要素は講義型講座においても強い影響力を持っていた。つまり、この要素は、講義型講座だけでなく授業研究型講座でも、全講座全体を通して受講者にとって重要であると言える。

5. 結 論

最後に、本研究の結果とそこから推察できる教育的示唆をまとめる。第一に、MEIKAI-JOE プラスの小学校英語指導者養成講座を受ける受講者が絶対的基準を持って講座を受講していた訳ではないことが分かった。つまり、最重要とすべき絶対的な要素は存在しないということである。これは金子(2021)では分からなかったことである。

しかし、受講者は講座を評価する際に全く自由に評価しているわけではなく、講座ごとに違ってはいるにしてもいくつかの要素が基準となっていることも確認できた。これは金子(2021)の研究結果を追認するものである。受講者が講義型講座と授業研究型講座の両方を含めて今回講座全体を通して判断基準としていたものは、①講師の説明の分かりやすさ、②講座内資料の有用性、そして③講座内タスクの有用性、要素である。この 3 つの要素は、今後同じような小学校英語指導者養成講座を実施する場合に実施者は十分に考慮すべき点である。他にも、授業研究型講座のアンケートには質問として含めなかったため講座全体を通してとは言えないが、少なくとも講義型講座の評価アンケートの結果からは、「受講者のニーズにと合致する講座内容」も必ず配

慮すべき点である。これは、金子（2021）の結果からも既に確認されている。

本研究を通して、上述した結果とそれに基づく示唆を得ることができたが、この研究の限界も最後に触れておきたい。それは、講座の満足度を評価するためにアンケートの他の質問を利用したが、質問自体が講座の全ての評価をするために十分でなかった可能性もある。講座の評価をより完全に行うためには質問の数や質に関しても検討する必要があるかもしれない。また、他の小学校英語指導者養成講座のアンケートなどもさらに参考にすることもできると考えられる。さらに、本研究に参加した参加者はMEIKAI-JOE プラスの受講者であり、5つの区市の限られた教員であり、広く日本全国の小学校教員全体を十分に代表しているとは言い難い。これらの理由によって、本研究の結果や示唆を広く一般化するには十分に注意が必要である。

最後に、本稿で述べた結果とそれに基づく示唆が今後の小学校英語指導者養成講座等の計画及び実践において活用されることになれば、これにまさる喜びはない。

謝 辞

2年連続で本学に事業を委託してくれた文部科学省の

関係者にはお礼を申し上げたい。本学の小学校英語教育に関する研究と教育実践力を活用させていただく機会を得ることができた。また、2020年度から2年連続で事業に参加してくれた足立区教育委員会と浦安市教育委員会、そして横手市教育委員会の関係者、2021年度から参加してくれたいわき市教育委員会と妙高市教育委員会の関係者の皆様、そしてこの2年間の講座を受講してくれた受講者の皆様に感謝を申し上げる。受講者のアンケートへの協力により、今回の研究を成り立たせるだけの十分な情報を集めることができた。

引用文献

- 石川 有香. (2010). 「第5章 回帰分析：データから説明モデルを作る」『言語研究のための統計入門』東京：くろしお出版
- 金子 義隆. (2021). 「小学校英語指導者養成講座に求められる要素」『明海大学教職課程センター研究紀要』第4号, 9-17.
- Kaneko, Y., & Otoshi, J. (2012). Exploring Causal Relationships between Attitudes toward English Education in Elementary Schools and English Learning Motivation: Based on a Survey of Current Teachers and Prospective Teachers. *Studies in Comparative Culture*, 101, 63-77
- 文部科学省. (2014). 『小学校外国語活動実施状況調査』
https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1362148.htm
- 文部科学省. (2017). 『中学校学習指導要領解説 外国語編 英語編』東京：開隆堂
- 田尻 悟郎. (2006). 『日本の英語教育に必要なこと 小学校英語と英語教育政策』 慶應義塾大学出版会

資料1

〈MEIKAI-JOE プラス 第1回～第6回講座 評価アンケート〉

ご所属地区

(足立区／浦安市／横手市／いわき市／妙高市)

お立場

(1・2年学級担任／3・4年学級担任／5・6年学級担任／英語専科／他教科専科・アドバイザー・その他／管理職)

外国語(活動)指導経験年数

(0～3年／4～6年／7～9年／10年以上)

外国語(活動)TT経験年数(日本人とのTTも含む。)

(0～3年／4～6年／7～9年／10年以上)

1. 講座の内容は理解できましたか。

(そう思う／まあそう思う／どちらともいえない／あまりそう思わない／そう思わない)

2. 講座の内容は学校現場のニーズに合っていましたか。

(そう思う／まあそう思う／どちらともいえない／あまりそう思わない／そう思わない)

3. 上記2で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

4. 講座内容をご自分にとって適切でしたか。

(難しかった／やや難しかった／適切／やや簡単だった／簡単だった)

5. 講座で提示された資料は今後活用できますか。

(そう思う／まあそう思う／どちらともいえない／あまりそう思わない／そう思わない)

6. 上記5で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

7. 講師の説明は分かりやすかったですか。

(そう思う／まあそう思う／どちらともいえない／あまりそう思わない／そう思わない)

8. 講座前のタスクは役に立ちましたか。

(そう思う／まあそう思う／どちらともいえない／あまりそう思わない／そう思わない)

9. 上記8で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

10. 講座中のタスクは役に立ちましたか。

(そう思う／まあそう思う／どちらともいえない／あまりそう思わない／そう思わない)

11. 上記10で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

12. 総合的にこの講座に満足できましたか。

(満足／まあ満足／どちらともいえない／やや不満／不満)

13. 上記12で「やや不満」か「不満」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

14. このような機会がまたあれば、受講したいですか。

(そう思う／まあそう思う／どちらともいえない／あまりそう思わない／そう思わない)

資料2

〈MEIKAI-JOE プラス 第7回～第10回講座 評価アンケート〉

ご所属地区

(足立区／浦安市／横手市／いわき市／妙高市)

お立場

(1・2年学級担任／3・4年学級担任／5・6年学級担任／英語専科／他教科専科・アドバイザー・その他／管理職)

外国語(活動)指導経験年数

(0～3年／4～6年／7～9年／10年以上)

外国語(活動)TT経験年数(日本人とのTTも含む。)

(0～3年／4～6年／7～9年／10年以上)

1. 授業動画の中で授業者が行った言語活動は今後ご自分の授業で活用できそうですか。

(そう思う／まあそう思う／どちらともいえない／あまりそう思わない／そう思わない)

2. 上記1で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

3. 動画視聴後の協議で出た他の先生方からのコメントは参考になりましたか。

(そう思う／まあそう思う／どちらともいえない／あまりそう思わない／そう思わない)

4. 上記3で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

5. 講師の指導・助言は役に立ちましたか。

(そう思う／まあそう思う／どちらともいえない／あまりそう思わない／そう思わない)

6. 上記5で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

7. 総合的にこの講座に満足できましたか。

(満足／まあ満足／どちらともいえない／やや不満／不満)

8. 上記7で「やや不満」か「不満」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

9. このような機会がまたあれば、受講したいですか。

(そう思う／まあそう思う／どちらともいえない／あまりそう思わない／そう思わない)